

未熟児養育医療受給者とその保護者の交流会を実施しての一考察

○宮田志保（現高千穂保健所） 有木昌子（現高鍋保健所） 竹井正行（現延岡保健所）
興梶郁子 横山真知子 阿波野恵（都城保健所） 藤本茂紘（現小林保健所）

1. はじめに

近年、出生数は年々減少傾向にあるが、出産時の母親の高齢化、多胎および早産の増加、周産期医療の発達などにより、低出生体重児の出生率は上昇しており¹⁾、都城保健所管内においても低出生体重児は増加傾向にある²⁾。

低出生体重児は身体発育や精神運動発達などが正常産児とは異なるため、両親や養育者の不安も大きい。そのため、フォローアップ、ケアに関わる人達はその発育・発達の特徴を熟知して、両親等の不安を取り除くことが求められる³⁾。

そこで、未熟児養育医療申請窓口の当保健所では、平成20年度より未熟児養育医療受給者とその保護者の交流会を実施してきた。

今回は、交流会の効果的な実施を目指して、アンケートより得られた結果を基に、2年間の実績を考察したので報告する。

2. 交流会のまとめ

(1) 交流会の概要

1) 目的: 児とその保護者に早期に関わり、顔を合わせ、情報交換を行うことで保護者の育児不安等を除去すること

2) 対象: 平成19年度は1, 500g未満、平成20年度・21年度は2, 000g未満の未熟児養育医療を受給した児とその保護者（平成22年3月実施分の呼びかけ人数は86名）

3) 運営: 保健所スタッフ（保健師2名、栄養士）、心理士、助産師、保育士（平成22年3月のみ）の全6名

4) 内容: 全体は1時間30分。保護者同士の交流が主体であり、個別の栄養相談、おっぱい相談、発達相談、及び保育士に

よる集団での遊びを行った。事業前後にスタッフミーティングを行った。（保育士による遊びは平成22年3月のみ）

5) 事後フォロー: 訪問、市町への情報提供や療育相談、発達センター等の紹介

6) 実施状況（参加人員については、母、児を含む）

年度	実施回数	参加実人員	参加延人員
平成20年度	3回	46名	76名
平成21年度	3回(4回計画していたが、1回は感染症流行で中止)	41名	51名

7) 実施後のアンケート結果（平成21年度参加保護者23組のうち23組分回収）

児の平均月齢は10.3か月、平均修正月齢は8.4か月。1歳未満が69.6%。初回参加が60.9%と過半数を占めた。

『参加した理由』は、表1のとおり、『低体重だから』が一番多い回答である。

表1

参加した理由(複数回答)	人数	割合
低体重児だから	17	73.9%
相談事(離乳食)	12	52.2%
相談事(発達)	6	26.1%
何となく	3	13.0%
その他	3	13.0%
※ その他については、双子のお母さんと話してみたかった、母乳相談、安心するため等		

『育児で困り事がある』のは表2のとおり8名、『交流会に参加することで目標達成できた』のは95.7%であった。

表2

育児での困り事	人数	割合
あり	8	34.8%
離乳食	6	26.1%
発達	2	8.7%
なし	15	65.2%

『交流会以外の教室等へ参加している』人の中で、ドラえもんサークルへ2組が参加していることから、73.9%が、低出生体重児の交流会にのみ参加している。

表3

交流会以外の教室への参加	人数	割合
行っている	9	39.1%
ドラえもんサークル	3	13.0%
市町村事業	5	21.7%
その他	1	4.3%
行っていない	14	60.9%

※ ドラえもんサークルとは、都城病院のNICU卒業した児と保護者らのサークル

『交流会があったほうがよいと思う』は100%、『何歳まで参加したい』という問いでは、1歳まで13.0%、2歳まで21.7%、3歳まで43.5%であった。

『交流会の内容はよかったと思う』は100%。その他の意見は表4のとおりであり、保護者同士で連絡先を交換している姿や、また次回会いましょう、と話されている姿が見られた。

表4

交流会の内容について
・他の児や保護者と話せてよかった
・もっと他の保護者とゆっくり話す時間がほしい
・遊び方を教えて欲しい
・離乳食について、作り方について教えて欲しい
・音楽遊びがしたい
・同じ境遇の親子さんと会話でき、大変安心できました

8) 実施後のスタッフ間での気づき

- ・参加呼びかけを最大3歳まで行ったため、月齢にばらつきがありケガの危険が増す
- ・月齢に合わせた遊びが難しい
- ・交流会参加までに、離乳食の指導を受けていない児が多いことがあげられた。

3. 考察

効果的な育児支援を考える場合、発達上のリスクの高い集団を適切に把握し、その子ども達のための支援プログラムを用意しておくことはきわめて大切である⁴⁾。

この2年間の交流会を実施し、直接児と保護者に関わることで、保護者のメンタルケア支援や育児指導、保護者同士の交流の大切さ、そして交流会開催に対する保護者のニーズがあると実感した。

アンケートの回答より、参加者全員が交流会について肯定的で、更なる交流会の内容の充実を期待しており、目的達成の評価

も高く、この交流会が保護者同士の交流や仲間づくりの場として有効と考えられた。

養育医療受給者の保護者は、低体重であったことへの不安や自責感が強く、この交流会に参加した児の約7割が、市町村の教室には参加していないことが明らかとなった。その理由の1つとして、ある保護者は、「市町村実施の乳児対象の育児教室には自分の子どもは小さいから参加しづらい」と話し、低出生体重児の保護者で集まる機会を希望していた。そのことから、交流会の意義は重要であると思われた。

しかし、平成22年3月の交流会には、呼びかけた86組に対し参加したのは7組、9.3%と少なかった。このことについては、今後、広報の仕方や対象を分け、個別性を重視することも必要と考えられる。

これに合わせて、参加しない家族への支援をどうするか重要であると同時に課題でもあるが、このような家族には訪問指導にて支援していくことが必要と思われる。

親の悩みや心配事は多種多様で、ニーズも様々である。そこへ保健所、市町村、医療機関等が、それぞれの人に合った支援を実施することで、きめ細やかな母子保健事業が組み立てられると考える。

4. まとめ

平成22年度は、交流会の時間を2時間とし、遊びの内容の充実、関係機関との連携を図ることで、さらなる都城保健所管内の母子保健対策の資質の向上を目指したい。

● 参考文献

- No.1) 多田裕：多胎児・低出生体重児出生の現状と課題、多胎児と低出生体重児の家庭支援、4-10、2009-3
- No.2) 平成21年度都城保健所業務概要
- No.3) 松石豊次郎：低出生体重児の発育・発達、母子保健情報 第43号、19-23、2001-8
- No.4) 高田哲、常石秀市、佐藤真子：極低出生体重児の育児支援～神戸市の地域母子保健事業の試み～、母子保健情報 第43号、71-75、2001-8